

花過ぎの

松岡隆子

円卓に足す椅子二つ花の昼
水辺りの何処に佇ちても飛花落花
吹かれ飛ぶ言葉の数や花吹雪
散る花のけふの白さを水のうへ
残桜や霽るると思へばまた雨に
急がねば今日が昏るるよ花筏
花筏こころ流されゆくごとし

ひと片の残花の冷を唇に
花過ぎの鏡の奥を風が吹く
ポケットに掴むものなき春コート
ゆく春の胸突き坂を十歩ほど

一山の風音高き弥生かな

今から二十数年前のことになるだろうか。関口芭蕉庵の前を流れる神田川で見事な花筏に出遭った。止め処なく散る花に川は一面桜色に染まり、川幅いっぱい流れ花筏は息をのむほど美しかった。次々と流れて行く花筏に今と違う一瞬が刻々と流されて行く思いがした。その時以来私は散る花に惹かれるようになった。先日もう一度あの花筏を見ようと神田川沿いを歩いた。遅かった。護岸沿いを流れる僅かな花筏は色褪せていて時おり残りの花が散りかかっていた。来年は落花情報を見て川いっぱいの花筏を見に行こうと思う。果たして落花情報なるものがあるかどうかだが。